

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2013 年 6 月

「パートIー贖罪の犠牲 (VI)」 「現世と来世」 「千年期」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「パートI-贖罪の犠牲 (VI)」

4

朝のマナ

「現世と来世」

8

信仰によってわたしは生きる

現代の真理

「千年期」

39

最後の出来事

力を得るための食事

「簡単ニラチヂミ」

50

お話コーナー

「おさら洗いゲーム」

52

教会

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話 : 0494-22-0465

FAX : 0494-26-5059

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話 : 088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話 : 0980-55-8136

アクセス

ホームページ : <http://www.4angels.jp>

メール : support@4angels.jp

発行日 2013 年 5 月 31 日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Sozai on front cover;

HighRes on pages 48

Printed in Japan

キリストの宗教

わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。……あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにものものの楽しみがある。(詩篇 16:8～11)

わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。……わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。……あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。……父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにいるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにいるのと同じである。わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。(ヨハネ 15:4～11)

キリストの宗教は、ただ罪の許しを与えるだけではない。それは、まずわたしたちの罪を取り去って、そのあいたところを、聖霊の徳で満たすのである。これは、神の光を受けて、神にあって喜ぶことである。自己を全くむなくして、絶えず、キリストの臨在の祝福を受けることである。キリストが魂を支配なさるときに、そこには、純潔と、罪からの自由がある。福音の計画の栄光と、その満ち満ちた完全さが生活の中に完成されるのである。救い主を受け入れることによって、完全な平和、完全な愛、完全な確証の喜びを味わうことができる。神が確かにみ子を世の救い主として、世界に送られた証拠として、わたしたちの生活のなかに、キリストの品性の美とかぐわしさがあらわれるのである。(キリストの実物教訓 395,396)

人間という器に天来の光が照り輝くとき、その人の表情は、心の中の主にある喜びを表すであろう。……神を受け入れるすべての者にとって、喜ぶことは神の言葉の基調そのものである。なぜか。彼らは命の光をもっているからである。光は喜びをもたらし、その喜びが生活と品性のうちに表されるのである。(原稿 96, 1898 年)

贖罪

パート I－贖罪の犠牲 (VI)

XII. 正義と憐れみは十字架で混じり合う

正義と憐れみは、離れて反対に向きあい、広い深淵で分かれていた。主なるわたしたちの贖い主は、ご自分の神性を人性で覆い、人のために、しみもぎずもないご品性を実現された。このお方はご自分の十字架を天と地の間に立てられ、それを両方に手を差し伸べ引きつける対象とし、深淵を越えて正義と憐れみの両方を引き寄せた。正義はその高められた御座から動いて、天の全軍と共に十字架へ近づいた。そこで、正義は神と等しいお方があらゆる不正と罪のための刑罰を負っておられるのを見た。正義は完全に満足して十字架で敬神のうちに頭を垂れて言った、「十分である」。(世界総会冊子、第四半期 1899 年 3 卷 102)

キリストの死は、神の政権と統治に欠陥がないことを証明した。正義と憐れみの相反する特質に関するサタンの告発は、疑義の余地なく永遠に決着がついた。天の内外にてすべての声がいつか神の正義、憐れみ、そして高められた特質について証をするようになる。それはキリストが人類のために刑罰を担われた贖いの契約の条件を、宇宙が理解するためであった。(原稿 1897 年 128)

このお方〔キリスト〕の目的は、正義と憐れみの大権を和解させることであり、各々その尊厳のうちに分離していながら、なお結合させることであった。このお方の憐れみは弱さではなく、かえって罪が罪であるがゆえにそれを罰する恐るべき力であるが、なお、それは人類の愛をそれに引きつける力である。キリストを通して、正義はその高められた聖潔の一点も犠牲にすることなく許すことができるようになる。(世界総会冊子第四期 1899 年 3 卷 102)

正義は、単に罪が許されないことだけでなく、死刑が執行されなければならないことを要求する。神は、ご自分のひとり子という賜物のうちに、これらの両方の要求に応じられた。人の代わりに死ぬことによって、キリストは刑罰をことごとく受け、許しを備えられた。(原稿 50, 1900 年)

神は満足してご自分のみ頭を垂れられた。今や正義と憐れみは混じり合うこ

とができるのであった。今やこのお方は正義であられながら、なおキリストを信じるすべての者を義認するお方となることができた。このお方〔神〕は、十字架上で息を引き取ろうとしている犠牲をご覧になって、「事はすでになった。人類はもう一度試験が与えられるのである」と言われた。贖いの代価は支払われた。そしてサタンは天から電光のごとく落ちたのであった。(ユース・インストラクター 1900 年 6 月 21 日)

神のひとり子は、ご自分に人の性質を取られ、十字架を天と地の間にお立てになった。十字架を通して、人は神に引き寄せられ、神は人に引き寄せられる。正義はその高く恐るべき地位から動き、また天の万軍と聖潔の軍勢は十字架に近づき、敬神のうちに頭を垂れた。なぜなら、十字架で正義が満足させられたからである。十字架を通して罪人は、罪の要塞、すなわち悪の徒党から引き寄せられる。そして、十字架に近づくごとに彼の心は和らぎ、悔悟のうちに彼は、「神の御子を十字架につけたのはわたしの罪であったのだ」と叫ぶ。十字架の下で、彼は自分の罪を離れ、キリストの恵みを通して彼の品性は変えられる。贖い主は罪人をちりから起こされ、彼を聖霊の導きの下におかれる。(サインズ・オブ・タイムズ 1893 年 6 月 5 日)

XIII. 贖罪は神の不変の律法を擁護する

十字架は天の万軍に、墮落していない諸世界に、そして墮落した世界に、神が人類におかれた価値について、またこのお方がわたしたちを愛して下さったその大いなる愛について語る。それは世に対して、御使たちに対して、人類に対して、神聖な律法の不変性を証する。十字架上の神のひとり子の死は、エホバの律法の不変的な性質についての反駁の余地のない論証である。(レビュー・アンド・ヘラルド 1899 年 5 月 23 日)

キリストの十字架は罪人に対して、律法は自分の罪のうちにいる罪人に合わせるために変更されてはおらず、かえってキリストは律法の違反者が悔い改める機会を得ることができるようにご自身を捧げ物とされたことを証する。キリストはすべての罪人の罪を負われたので、キリストを自分の個人的な救い主として信じず、自分にもたらされる光を拒み、神の戒めを尊重して従うことを拒否する罪人は、自分の不法の刑罰を負うのである。(原稿 133, 1897 年)

キリストの死は、神の律法がその御座と同様に不変のものであることを納得させずにはおかない永遠の論証となるのであった。ゲッセマネの園での苦悩、侮辱、嘲り、神のいとし子に積み上げられた虐待、十字架の恐怖と屈辱は、神の正義が罰するときには、徹底的にその働きをなすという十分に恐るべき現れを提示している。ご自身のひとり子、すなわち人のための保証人の命が救われなかったという事実は、永遠にわたって聖徒と罪人の前に、また神の宇宙の前に、このお方がご自分の律法の違反者を容赦なさることはないということを証する論証である。(原稿 58, 1897 年)

サタンは天で始めた働きを地上で続けている。彼は人が神の戒めを破るように導いている。率直な「主はこう言われる」は、人の「こう言う」に置き換えられている。全世界は神の託宣において教えを受け、贖罪の目的、すなわち神と一つにする (at-one-ment) を理解する必要がある。この贖罪の目的は、聖なる律法と統治が維持されることであった。罪人は神に対する悔い改めとわたしたちの主なる救い主イエス・キリストを信じる信仰を通して許される。罪の許しがあるが、なお神の律法はその御座と同様に不変であり、永久的である。エホバの律法を弱めたり、強めたりするということはない。それはこれまでそうであったとおりに、これからもそうなのである。それは一つの原則においても、無効にしたり、変更したりすることはできない。それは神ご自身と同様に、永遠であり、不変である。(原稿 163, 1897 年)

サタンは世界から、律法をことごとくその聖なる尊厳のうちに表し、人の心にその拘束力を印象づける偉大な贖罪の犠牲を隠しておこうと努めている。彼はキリストの働きに対して戦っており、その働きに反して、自分の悪天使たちをことごとく人間の器と結合させてきた。しかし、彼がこの働きを実行している一方で、天の知的存在者たちは、回復の働きにおいて人間の器と結合していた。十字架は世界の大中心として、キリストの十字架がすべての神の律法の違反者に有罪宣告となるというしかるべき証を担って立っている。ここに二つの偉大な力、すなわち真理と義の力と神の律法を無効にするためのサタンの働きがある。(原稿 61, 1899 年)

キリストの死は、サタンがエホバの規則に対してもたらしうるすべての議論を取り除く。サタンは律法が廃され、違反者が再び神の恩寵へ回復される方法が考案され、天の相続人とされない限り、人が天の王国に入ることはできないと宣

言してきた。彼は律法は変更されなければならない、天における統治の手綱は緩められなければならない、罪が容認されなければならない、罪人を憐れみ、その罪のうちに救わなければならないと主張してきた。しかし、そのような訴えは、キリストが罪人の身代わりとして死なれたときに払拭された。(サインズ・オブ・タイムズ 1912 年 5 月 21 日)

信仰によってわたしは生きる

The Faith I Live By



6月 「現世と来世」

時—尊いタラント

「われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください。」(詩篇 90:12)

わたしたちの時は、神に属するものである。一瞬、一瞬が神のものである。そして、わたしたちには、その時を神の栄光のために活用するように、きわめて厳粛な責任が負わせられている。神がお与えになったたまものなかで、わたしたちの時間ほどに厳密な説明が求められるものは他にないのである。

時の貴重なことは、実に想像以上である。キリストは、一分一秒を貴重なものとみなされたが、わたしたちもそう思わなければならない。人の一生は、むだにすごすには、あまりにも短い。永遠のために備えをすべき恵みの日は、ほんのわずかしかない。浪費したり、自己の快樂のために用いたり、罪にふけったりする時間はない。将来の永遠の命のために品性を形成するのは、今である。厳密な審判の時の備えをするのは、今である。

人類家族は、死ぬころになってからはじめて、真に生き始めるようなものである。……働きをする時間として、時を尊重するものだけが、永遠の命とその住居とにはいるにふさわしいものである。その人は、この世に生まれたかいがあつたといえるのである。わたしたちは、今の時を生かして用いるように勧められている。しかし、むだに過ぎた時間は、永久に帰ってこない。一瞬間でも呼びもどすことはできない。ただ残っている時間を神の協力者となって神の大贖罪計画のために最善をつくすことによって、時をあがなうことができるだけである。……

一秒一秒は、永遠にわたって重大な影響を及ぼすものである。いつでも義勇兵のように召集に応じて、奉仕をするために立たなければならない。助けを必要としている魂に命のこばを語るために今、与えられている機会は、もう二度とこないかも知れない。その人に向かって、神が「あなたの魂は今夜のうちにでも取り去られるであろう」と言われるならば、その人は、わたしたちの怠慢のために用意ができないことになってしまうのである(ルカ 12:20)。大いなる審判の日に、わたしたちは、なんといつて神の前に申し開きをしたらよいであろうか。(キリストの実物教訓 317～319)

怠慢に対する治療法

「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、」(ローマ 12:11)

キリストの生涯は、その幼少のときから、熱心な活動の生活であった。イエスは、自分を楽しませる生活をなさらなかった。彼は、無限の神の御子であったにもかかわらず、父ヨセフと共に大工の仕事をされた。彼の職業は意義深いものであった。彼は、品性の形成者としてこの世界においてになり、彼のすべての仕事は完全であった。キリストが天の力によって人々の品性を完全に改変なさると同様に、この世の仕事をも完全になさったのである。彼はわれわれの模範である。(キリストの実物教訓 321)

整頓(せいとん)、徹底、敏速の習慣をつけることは、すべてのクリスチャンの義務である。たとえ、どのような仕事にせよ、だらだらと不手ぎわにしてよい理由はない。常に仕事をしていながら、仕事が完成されないとすれば、それは仕事に心を入れていないからである。……けれどもだれでも意志さえ働かせれば、このような手数のかかるぐずぐずした習慣に打ち勝つことができる。(同上 320)

聖書は怠惰であってよいとは言っていない。怠惰はこの世界の最大ののろいになっっている。真に悔い改めた男女は、すべて勤勉に働く者となるのである。

知識を得、知力を啓発するか否かは、時間を正しく活用することにかかっている。知力の啓発は、貧困であるとか、身分がいやしい身分であるとか、逆境にあるからといって妨げられるべきものではない。ただ時間を重んじればよいのである。なんのあてもないむだ話、朝、床の中で浪費する時間、電車や汽車の中、駅で待つ間、食事を待つ時間、約束の時間に来ない人を待つ間などの時間を、本を手にしていて、研究、読書、思案などに活用するならばどのようなことが成しとげられるかわからない。堅い決心をもって、たゆまぬ努力を重ね、注意深く時間を節約するならば、知識と知的訓練を受けることができ、どのような地位にでも適した者となり、よい感化を及ぼし、立派に役立つ人物となるのである。(同上 319, 320)

金銭の真の価値

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。」(箴言 3:9, 10)

この聖句は、神が、わたしたちのあらゆる恩恵の与え主として、それらすべてのものに権利を持っておられること、その権利をわたしたちが第一に考慮すべきこと、またこの権利を尊ぶすべての者には特別な祝福が伴うことを教えている。

この中には神が人間を取り扱われるすべてに見られる原則が示されている。主はわたしたちの最初の両親をエデンの園に置かれた。このお方は彼らの幸福に寄与しうるあらゆるもので彼らを囲み、ご自分を万物の所有者であることを認めるようにとお命じになった。このお方は園の中にありとあらゆる目に美しく、食べるに良い木を生じさせられたが、その中の一本を取っておかれた。他のすべての木からはアダムとエバが自由に食することができた。しかし、この一本の木に関して神は「取って食べてはならない」と言われた。ここに神への彼らの感謝と忠誠とのテストがあった。

同様に、主はわたしたちにイエスをお与えになることによって、天の最も豊かな宝を与えてくださったのである。イエスと共に、このお方は、ありとあらゆるものを楽しむように豊かに与えてくださったのである。(執事への勧告 65)

神は……人々に財産をおゆだねになる。神は、富を得る力を彼らにお与えになる。……

金銭は、わたしたちが自分に栄えを帰するために与えられたものではない。わたしたちは、忠実な管理者として、神に栄光を帰するために、金銭を用いなければならない。自分たちの財産の一部分だけが神のものであると、思っている人がある。宗教的、慈善的目的のために一部分をささげれば、あとは、自分のもので自由に使用してもよいと、彼らは考える。しかし、これはまちがいである。わたしたちの所有するものはみな主のものであって、その用途について、責任を負わなければならない。一円の金を使うにも、神を第一に愛し、自分のように隣人を愛しているかどうかが変わるものである。金銭は、大いなる善をすることができるから、大きな価値がある。それが神の子供たちの手にあれば、貧しい人の食事、かわいた人の水、裸の人の着物となる。……金銭は、困っている人々を助け、他の人々を祝福し、キリストの働きを前進させるために用いてこそ、価値があるのであって、もしそうでないならば、金銭は砂と同様でなんの価値もないのである。(キリストの実物教訓 326, 327)

目ざめている良心

「目ざめて身を正し、罪を犯さないようにしなさい。あなたがたのうちには、神について無知な人々がいる。あなたがたをはずかしめるために、わたしはこう言うのだ。」(コリント第一 15:34)

ある教会において……霊性、敬神、愛、活動に決定的な進歩がなしとげられた。什一と諸献金において神のものを盗む罪についての説教がなされた。……

多くの者が何年も什一を払っていなかったことを告白した。そしてわたしたちは、神のものを盗んでいる者を神は祝福することがおできにならないこと、また教会はその信者一人びとりの罪の結果に苦しまなければならないことを知っている。……

ある兄弟は二年間什一を払っていなかったと言い、落胆していた。しかし、彼は自分の罪を告白したとき、希望を持ちはじめた。「わたしはどうしたらよいでしょうか」と彼は尋ねた。

わたしは、「教会の会計に手形を渡しなさい。それが实际的です」と言った。

彼はそれをかなり奇妙な要求だと思った。しかし、彼は座って、書き始めた。「受けた価値に対して、わたしは――を支払うことを約束をする」。これは主に対して手形を書くのに適切な書式ですかというかのように、彼は上を見上げた。

「そうです」と彼は続けた。「受けた価値に対して。わたしは来る日も来る日も神の祝福を受けてこなかったであろうか。天使たちはわたしを守ってくれたのではなかったか。主はあらゆる霊的なまた物質的な祝福をわたしに与えてくださらなかったであろうか。受けた価値に対して、わたしは教会の会計に 571 ドル 50 セント払うことを約束をします」と書いた。彼は自分のなし得る分をなし尽くした後、幸福な人になった。数日のうちに彼は、手形を支払い、什一を会計に収めた。彼はほかに 125 ドルのクリスマス献金をした。

他の兄弟は 1,000 ドルの手形を出して、数週間のうちに払う約束をした。他の人は 300 ドルの手形を渡した。……

もしあなたが神のものを盗んでいたのであれば、返還しなさい。できるだけ、過去を正しなさい。それから、あなたを許してくださるように救い主に求めなさい。今年が記録の重荷と共に永遠に過ぎ去っていく前に、あなたは主ご自身のものをこのお方にお返ししないのであろうか。(執事への勧告 95 ~ 98)

生きた慈善

「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、幸いである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。」(使徒行伝 20:35)

わたしたちは自分自身を主の所有物の管理者として、またこのお方を最高の所有者として、すなわち神が要求なさるとき、この方ご自身のものをお返しすべきお方としてみなすべきである。……

神の僕たちは毎日、善行と神への惜しみない捧げ物によって遺言を作成すべきである。(教会への証 4 巻 480, 481)

死ぬときの遺産は、生きた慈善のみじめな代用品である。(同上)

死蔵された富は、価値がないばかりでなくて、のろいである。それは、天の宝から人の心を遠ざけてしまうこの世のわなである。神の大いなる日に、用いられなかったタラントや無視された機会は、その所有者を責めることであろう。……金銭が神から与えられたタラントであることを悟る者は、だれでも、それを節約して用い、他に与えるために、たくわえておくことを義務と感ずることであろう。(キリストの実物教訓 327, 328)

来世のための備えを、現世のほとんど最後の時まで延ばすことは全く愚かなことである。また自分の管理職を他の人に譲らなければならない時が来るまで、神のみ事業のための惜しみない心を求める神のご要求に応えずに延ばすことも大きな間違いである。あなたが財産というタラントを委ねる人々は、あなたが果たしてきたようにうまくできないかもしれない。富める者はあえてそのような大きな危険を犯すことができようか。死ぬ時までその財産を処分するのを待つ人は、神よりもむしろ、死に対してそれを明け渡すのである。そうすることによって、多くの者は、神のみ言葉の中に明らかに述べられている神のご計画に真っ向から反対して行動している。もし彼らが善をなしたいと思うなら、現在の黄金の機会を捕らえ、そのよい機会を失うのを恐れるかのように、全力をあげて働かなければならない。……

わたしたちはみな、来世の不死の命を確保したいのであれば、現世においてよい働きに富まなければならない。審判を行う者がその席に着き、かずかずの書き物が開かれるとき、一人びとりはその働きに応じて報いられるのである。(教会への証 4 巻 480, 481)

小事に忠実

「主人は言った、『よい僕よ、うまくやった。あなたは小さい事に忠実であったから、十の町を支配させる』。」(ルカ 19:17)

タラントは、活用すれば、増加する。成功は、偶然や幸運の結果ではない。それは、神ご自身の摂理の結果で、信仰と思慮深さ、徳と不撓（ふとう）不屈の努力の結果である。神は、わたしたちが、すべてのたまものを活用することを望んでおられる。そして、今持っているたまものを活用すれば、さらに大きなたまものを用いるようになる。神は、わたしたちに欠けている特質を超自然的にお与えになったりしない。しかし、わたしたちが、持っているものを活用するとき、わたしたちと共に働いて、すべての能力を増大し強化してくださる。……

神の力を信じることによって、弱いものがどんなに強くなって不屈の努力を続け、大きな結果を生むようになるかは、驚くばかりである。たとえ、知識はわずかしなくても、その少しの知識をへりくだった気持ちで人々に伝えるものは、全天の宝庫が彼の要求に応じて開かれることを知るであろう。光を伝えたいと望めば望むほど、さらに光が与えられるのである。……

一タラントを渡された者は、「行つて地を掘り、主人の金を隠しておいた」。

タラントを活用しなかったのは、一番小さなたまものを渡された者であった。これは、自分のたまものは小さいから、キリストのご用に活用しなくてもよいと思うすべての者に対して与えられた警告である。もし彼らも、何かの大きなことができれば、どんなに喜んで、それをするのであろう。しかし、ほんの小さい奉仕しかできないから、何もしなくてよいと、彼らは考えるのである。これはまちがっている。神はたまものを分配なさることによって、人の品性をためしておられる。自分のタラントの活用を怠るものは、不忠実なしもべである。もし、彼が五タラント渡されたとしても、一タラントを土に埋めたように、五タラントを埋めたことであろう。……

タラントは、どんなに小さくても、神には、その使い場所がある。一つのタラントでも賢明に活用されるならば、それは、定められた働きを成し遂げるのである。小さい義務を忠実に果たしていくことによって、わたしたちは、加え算で仕事をしていくけれども、神は、掛け算で、わたしたちのために働いてくださるのである。このような小さいものが神の働きの中で、何よりの貴重な感化となるのである。(キリストの実物教訓 329 ～ 336)

すべての命の源

「命の泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によって光を見る。」(詩篇 36:9)

すべての被造物は神のみこころと力によって生きている。彼らは神に依存してその生命を受ける。最高のセラフから最もいやしい生物にいたるまで、すべてのものは生命の源である神から力を補充されるのである。(各時代の希望下巻 316)

青少年たちは、「いのちの泉であるあなたのもとにあり」と聖書は述べているみ言葉の基礎となっている深い真理をさとらなければならない。神は万物の創始者であるばかりでなく、生けるすべてのものの生命であられるのである。われわれは日光や清いさわやかな空気や、食物を通して、われわれの肉体を築き、われわれの力をささえるものを受けるが、それはとりもおさず神の生命である。われわれが、時々刻々に生存するのは、神の生命によるのである。罪のために悪用されているものを除けば、すべての神の賜物は、生命と健康と喜びに役立つのである。(教育 235)

神秘的な生命は自然のあらゆるものにゆきわたっている。それは、無限大の空間に無数の世界を保ち、夏のさわやかな風に浮かぶ小さな昆虫を生かし、飛びかうつばめを羽ばたかせ、鳴くからすのひなにえさをあたえ、つばみを花とひらかせ、花に実をむすばせる生命である。

自然をささえている同じ能力が人の中にも働いている。……体内の生命の流れを調節する心臓の働きを支配する法則は、魂の裁判権をお持ちになる偉大な英知の神の法則である。いっさいの生命は神から出ている。生命の真の活動範囲は、神との調和の中にのみ見いだされる。神によって造られたすべてのものにとって、条件は同一である。すなわち生命は神の生命を受けることによって維持され、創造主のみこころとの調和の中に生命の営みがなされるのである。知的に靈的に、あるいは肉体的に神の法則を犯すことは、自分自身を宇宙の調和の外におくことであり、不和と無秩序と破滅をもたらすことである。

自然の教えをこのように解釈することを学ぶ者には、あらゆる自然が光を放ち、世界は教科書、人生は学校となる。人と自然と神との調和、宇宙を支配している法則、罪の結果、—こういうことはかならず人の心に印象を与え、品性を形造らないではおかぬ。(同上 104, 105)

一瞬一瞬このお方はわたしたちを保護してくださる

「主こそ神であることを知れ。われわれを造られたものは主であって、われらは主のものである。われらはその民、その牧の羊である。」(詩篇 100:3)

創造の働きは科学をもって説明できない。生命の神秘を、どんな科学が解明し得るであろう。(ミストリー・オブ・ヒーリング 387)

命は神の賜物である。(健康への勧告 41)

肉体の生命は、一瞬一瞬神の力によって保たれている。しかもそれは、直接の奇跡によって支えられるのではなく、われわれの手の届くところに置かれている祝福を用いることによって、支えられるのである。(患難から栄光へ上巻 307, 308)

救い主は、人間を支持し、いやすために絶えず働いている力を、その奇跡によってあらわされた。自然界の手段を通して神は毎日、時々刻々にわたしたちの生命を継続させ、増進し、回復するために働いておられる。からだのどの部分でも、傷をうけると、治癒(ちゆ)の働きがすぐに始まり、自然の力が健康を回復するために働き始める。しかし、これらのものを通して働いている力は神の力なのである。人が病気からなおるときは神がおいやしになるのである。病気や苦痛や死は神に反する力のわざである。サタンは破壊者であり、神は回復者である。(ミストリー・オブ・ヒーリング 81, 82)

わたしたちが、神に対するわたしたちの関係とわたしたちに対する神の関係を理解するときに大いなる教訓を学ぶのである。(食事と食物への勧告 56)

わたしたちは、わたしたち固有の知性と個性をもっている。だれも自分の個性を他の人のそれに沈めることはできない。すべての者は、自分の良心の示すところに従って、自らのために行動しなければならない。わたしたちの責任と感化について言えば、わたしたちの命を神から得ているとき、わたしたちは神に従順になる。わたしたちはこれを人間から得るのではなく、神からのみ得るのである。わたしたちは創造と贖いとによって神のものである。わたしたちの身体そのものもわたしたちのものでなく、滅びに導く習慣によってそれをそこない、神に対して完全な奉仕をささげることが不可能にすべきではない。わたしたちの命とすべての機能は神のものである。彼は絶えずわたしたちを保護していただく。彼は身体組織を活動させ続けておられる。もし一瞬たりともわたしたちの手に委ねられたならば、わたしたちは死んでしまう。わたしたちは完全に神に依存しているのである。(同上)

人生の大目的

「目標を目指して走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」(ピリピ 3:14)

アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能の霊性は、神のみかたちをそなえていた。「神は自分のかたちに人を創造された」としてされている(創世記 1:27)。神の御目的は、人が長く生きれば生きるほど、ますます、はつきりと神のみかたちを表わすこと、すなわちなおいっそう明らかに創造主の栄光を反映することであった。人間のあらゆる才能は発達することが可能であって、それらの才能の能力と活力は絶えず増大することになっていた。そうした才能を働かせるために、広い機会が与えられ、研究のために輝かしい分野がひらかれていた。目に見える宇宙の神秘、すなわち、「知識の全き者のくすしきみわざ」が人の研究を招いていた(ヨブ 37:16)。創造主と顔をあわせて、心と心の交わりをすることが、アダムのとうい特権であった。もし彼が、神への忠誠心をかえなかったなら、この特権は、永久に彼のものとなったであろう。彼は、永遠にわたってたえず知識の新しい宝を手に入れ、幸福の新しい泉を見いだし、神の知恵と力と愛についていよいよ明らかな概念を持ちつづけたであろう。アダムは……創造主の栄光を、ますますはつきり反映したのである。

しかし、不従順のために、この特権は失われた。罪のために、神のみかたちは傷つけられ、ほとんど消えてなくなるばかりとなった。人の体力は弱くなり、知的な能力は低下し、霊的な眼はくもった。人間は死ななければならない身となった。しかし人類は、望みのない状態のままに捨てておかれなかった。限りない愛とあわれみによって、救いの計画がたてられ、生命の猶予があたえられたのである。人類を創造された神の御目的が実現されるように、人の中に創造主のみかたちを回復し、人を創造当初の完全な姿にもどし、知、徳、体の発達を促すこと、これが救済の働きとなるべきであった。これが教育の目的であり、人生の大目的である。(教育 4, 5)

キリストの栄えをあらわし、キリストのようになり、キリストのために働くことが、人生の最高の抱負となり、最大の歓喜となるのである。(同上 350)

人生は一度

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、『わたしには何の楽しみもない』と言うようにならない前に。」(伝道の書 12:1)

生命は神秘であり、神聖である。それはすべての生命の根源である神ご自身のあらわれである。生命の機会は尊いものであり、熱心にこれを用いなければならない。一度これを失えば、永久に返らない。

神は厳粛な現実性のある永遠をわたしたちの前に置き、不死不滅のものを手に握らせてくださる。神はわたしたちが安全確実な道を進むことができ、全能力をあげて一意努力するのに価値のある目的を遂行するために、品性を高める貴重な真理をお与えになる。

神は自らおつくりになった小さい種をながめ、その中に美しい花、灌木(かんぼく)、また高くそびえる枝を広げている木が包蔵(ほうぞう)されているのをご覧になるが、それと同じように各個人のうちに可能性を見られるのである。わたしたちはある一つの目的のためにこの地上に居るのであって、神はわたしたちの生涯のために計画を与え、わたしたちが最高の発育を遂げるように望まれている。

神はわたしたちがきよく、幸福に、そして有益な者になるように絶えず成長していくことを望んでおられる。わたしたちは皆能力を持っているが、それを神聖な財産とみなし、主のたまものとして感謝し、正しく使用するように教えられなければならない。全身の力を発育させ、あらゆる能力を盛んに働かせるように神は希望されている。この世においてわたしたちが、有益な、貴重なものをすべて楽しみ、よい人となり、よいことを行い、きたるべき国のために天の宝をたくわえるように望んでおられる。

利己的でなく、高級、高尚なことならどんなものにもですぐれた者になりたいというのが、彼らの熱烈な欲求でなければならない。青年が模倣すべき型としてキリストを見あげさせるべきで、その生涯に表わされているキリストの聖なる大望を青年が持ち、自分が世の中に生きていることによってこの世界をよりよくするという望みをいだかなければならない。青年が召されたのはこの働きをするためである。(ミニストリー・オブ・ヒーリング 366,367)

わたしたちにはただ一度の人生が与えられている。すべての人の問いは、「最大限に益を得るために、わたしは自分の人生をどのように投資したらよいだろうか。わたしがどのようにしたら、最もよく神の栄光と同胞の益のためになるであろうか」でなければならない。(節制 137)

人生の光景の背後に

「わたしは目しいを彼らのまだ知らない大路に行かせ、まだ知らない道に導き、暗きをその前に光とし、高低のある所を平らにする。わたしはこれらの事をおこなって彼らを捨てない。」(イザヤ 42:16)

人類歴史の記録の中では、世界の諸国民の発展や諸帝国の興亡は、人間の意志や勇氣に左右されているかのように見える。いろいろな事件の形成は、その大部分が人間の能力や野心やあるいは気まぐれによってきまるかのように見える。しかし、神のみ言葉である聖書の中には幕が開かれていて、われわれはそこに、人間の利害や権力や欲望の一切の勝ち負けの上に、また背後に、あるいはそれを通して、あわれみに満ちた神の摂理が、黙々と忍耐強くご自身の目的を達成するために働いているのを見るのである。

国々の争乱のさなかにも、ケルビムの上方に座したもう神はなお地上のできごとを導かれるのである。……神は……どの国家にもどの個人にも、ご自分の大いなるご計画の中にそれぞれの立場を割り当てておいでになる。国家も個人も誤ることのない神のみ手にある「はかりなわ」で測られているのである。われわれはみな自分自身の選択によって、自らの運命を決定しているのであつて、神はご自身の目的の成就のためにすべてを支配されている。

「有って有る者」にいます大いなる神が、永遠の過去から未来にいたる預言の鎖のわを一つ一つつらねて、聖書の中にはっきりとお示しになっている歴史は、現在、われわれが時代の進行のどの辺にいるか、そしてまた将来何が予想されているかを告げている。現在までに起るべく預言されていたすべての事件は、歴史のページの中にその跡をたどることができる。これから後に起るべき諸事件も必ずその順序通りに成就されるであろう。

われわれは、諸国の歴史と未来の事に関する啓示の中に、神の御目的の働きを学ばなければならない。そのときわれわれは、目に見えるものと目に見えないものとの真の価値を評価することができ、人生の真の目的が何であるかを知ることができる。そしてまたこの世の事物を永遠の光に照らしてみ、それらを最も真実に最も高潔に用いることができる。(教育 205, 210, 211, 218)

機会のあるうちに生きる

「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。」(伝道の書 9:10)

死ぬことは厳粛なことであるが、生きることはそれよりもはるかに厳粛なことである。わたしたちは、自分の生活における一つ一つの思想、言葉、行いに再び会うことになる。恩恵期間に自ら築き上げてきたとおりの自分を、わたしたちは永遠にそのまま持ち続けなければならない。死は肉体を崩壊させるが、品性には何の変化ももたらさない。キリストの再臨がわたしたちの品性を変化させることはない。それは、あらゆる変化を越えて永遠に固定するだけである。……

わたしは教会員にクリスチャンとなるように、すなわちキリストに似た者となるように懇願する。イエスはご自身のためではなく、他の人々のための働き人であられた。もしあなたがクリスチャンであるなら、このお方の模範に倣うはずである。……

わたしは、あなたがたが死の眠りから目覚めるようにと嘆願する。頭脳と骨と筋肉との力を自己奉仕のためにささげている場合ではない。最後の日にあなたが天の宝に欠乏していることが明らかにされることのないようにしなさい。十字架の勝利に邁進(まいしん)し、魂に光を与えることに、またあなたの同胞の救いのために働くことに努めなさい。そうすれば、あなたの働きは火のような苦しいテストにも耐えることができる。(教会への証 5 巻 466, 467)

わたしたちがしなければならぬ仕事は、自分の選ぶものではないかもしれないが、自分のために神が選ばれた働きとして受け入れるべきであることを覚えていよう。好きでも、好きでなくても、わたしたちは自分の最も身近にある義務を果たさなければならない。「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである」(伝道の書 9:10)。

もし神がわたしたちにメッセージをニネベに伝えるように望まれるならば、ヨッパやカペナウムに行くことを喜ばれない。わたしたちが導かれて行くところは理由があつて、そこへ神がおつかわしになったのである。ちょうどそこにわたしたちが与えることができる助けを必要としている人がいるかもしれない。(ミストリー・オブ・ヒーリング 456,457)

どの方面に従事していても、神のことばはわたしたちに次のように勧めている。「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、」……「あなたがたが知っているとおり、あなたがたは御国をつぐことを、報いとして主から受けるであろう。あなたがたは、主キリストに仕えているのである」(ローマ 12:11; コロサイ 3:24)。(キリストの実物教訓 322)

天の宝を求める

「あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてならない。」(コロサイ 3:2)

主は時と永遠について、また地と天について人間の相対評価を明らかにさせる。このお方はわたしたちが富のまし加わる時、これに心をかけてはならない(詩篇 62:10) と勧告しておられる。富は他の人を益するために、また神の栄光のために使用されるときに価値があるが、この世の宝があなたの嗣業、あなたの神、あなたの救い主であるべきではない。(教会への証 5 巻 261)

神は、ある人にはある方法で、またほかの人には別の方法で試される。ある人には豊かな富を与えることによって、他の人にはご自分の好意を保留することによって試される。このお方は富める者が富の与え主である神を愛し、また自分のように他人を愛するかをご覧になるために試される。人がこれらの恵みを正しく用いるとき、神はお喜びになる。そして、彼に大きな責任を委ねることがおできになる。(同上)

世俗的な人のうちには、自分が持っていないものへの渴望がある。彼は習慣の力によって、将来のために備える方向へと、あらゆる考え、あらゆる目的を傾ける。彼は年をとるにつれて、なお一層、獲得できるかぎりのものを手に入れようとますます熱心になる。……

世的な力を求めるこのいつさいの精力、辛抱強さ、決意、勤勉は、誤った目的のために彼の力を乱用した結果である。すべての才能は働かせることによって可能なかぎりの高さにまで高められ、天の不死の命と、あふれるばかりの永遠の重い栄光のために発達させることもできたのである。世俗の人が自分の蓄えを増し加えるための辛抱強さと精力、またすべての機会を利用することにおける彼らの習慣や実践は、神の子であると主張し、栄光と誉れと不死を求めている人々にとって教訓となるべきである。この世の子らはその時代において、光の子らよりも賢く、またここに彼らの知恵が見られる。彼らの目的とするところは世的な利益であって、この目的のために彼らのあらゆる精力を傾ける。ああ、この熱心が天の宝のために労している者の特徴であればよいのだが。(執事への勧告 149)

死の矢

「もし、彼らに知恵があれば、これを悟り、その身の終わりをわきまえたであろうに。」(申命記 32:29)

主は「心から人の子を苦しめ悩ますことをされない」(哀歌 3:33)。「父がその子をあわれむように、主はおのれを恐れるものをあわれまれる。主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」(詩篇 103:13, 14)。このお方は魂のあらゆる秘密をお読みになるので、わたしたちの心を知っておられる。……このお方は初めから終わりをご存知である。多くの者は、悩みのときという火のような試練がこの世に訪れる前に眠りにつかせられる。……

もし世の贖い主イエスが「わが父よ、もしできることでしたらどうかこの杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈り、「しかしわたしの思いのままではなくみこころのままになさって下さい」と付け加えられたのであれば、わたしたち死ぬべき人間が神の知恵とみ旨に同じ屈服をなすことはごく当然のことではないだろうか。(健康への勧告 375, 376)

この世の生涯は短く、いつ死の矢が心臓をつらぬくかわからない。いつこの世と世のいつさいの利益を捨てるように要求されるかわからない。永遠はわたしたちの目の前にあり、その幕は今にもあげられようとしている。この短い数年のうちに、現在、生きている者に数えられている人間一人ひとりに、次の命令が発せられる。

「不義な者はさらに不義を行い……義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ」(黙示録 22:11)。

わたしたちは準備ができていであろうか。わたしたちは、神、すなわち天の支配者であり、立法者であられるお方を、また神がご自分の代表としてこの世につかわされたイエス・キリストをよく知っているであろうか。自分の生涯の働きが終わったとき、模範であるキリストのようにわたしたちもこう言えるであろうか。

「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて地上であなたの栄光を表わしました。……わたしは……み名をあらわしました」(ヨハネ 17:4 ~ 6)。

天の使いは自分のこと、この世のことからわたしたちの心をそらせようとしている。彼らをむだに働かせないようにしよう。(ミストリー・オブ・ヒーリング 436, 437)

陰の中の光

「彼は悩みを与えられるが、そのいつくしみが豊かなので、またあわれみを持たれる。彼は心から人の子を苦しめ悩ますことをされないからである。」(哀歌 3:32, 33)

わたしの長男が16歳のとき、彼は病に伏した。その病状は危篤状態であると思われ、彼はわたしたちを病床の側に呼び、「お父さん、お母さん、あなたがたにとって自分の長男と別れることはつらいでしょう。もし主がわたしの命を助けるのが適当であると思われるなら、わたしはあなたがたのために喜びます。もし今わたしの命が終わるのがわたしのためであり、神のみ名の栄えになるのであれば、わが魂は安らかだと申し上げます。お父さん、お母さん、それぞれ別の場所に行って、お祈りください。あなたがたが愛し、またわたしの愛するわたしの救い主のみ旨にかなった答えが与えられるでしょう」。彼は、わたしたちが一緒に祈れば、わたしたちの同情心が強められ、神が最良と思ってわたしたちに与えようとしておられる以外のものを求めるのではないかと恐れたのである。わたしたちは長男がいやされるという証拠を何も与えられなかった。彼は、わたしたちの救い主イエスに完全に信頼して息を引きとった。彼の死はわたしたちにとって大きな打撃であったが、それは死においてさえも勝利であった。彼の命はキリストと共に神のうちに隠されていたからである。

長男の死ぬ前に、わたしの赤ん坊が死に瀕する病にかかった。わたしたちは祈り、神はわたしたちの愛児の命を助けてくださると思った。しかし、わたしたちは死のうちに彼の目を閉じたのであった。そして、命の賦与者がご自分の愛する者を栄光のうちに不死の命に呼び覚ますために来られるときまで、イエスにあって休むために彼を葬ったのである。

その後、イエス・キリストの忠実な僕であり、36年間わたしのそばに立っていたわたしの夫が取り去られ、わたしは残されて一人で働くことになった。彼はイエスにあって眠っている。わたしは彼の墓のために涙を流すことはない。しかし、わたしは彼がいなくてどれほど寂しいことであろうか。

神はしばしばわたしに、多くの子供たちが悩みの時の前に葬られることをお示しになった。わたしたちは自分の子供たちに再び会うのである。天の宮廷で彼らに会い、彼らがわかるのである。主にあなたの信頼をおきなさい、そして恐れてはならない。(セクレット・メッセージ 2 巻 258, 259)

幸いなる死人

「またわたしは天からの声がこう言うのを聞いた『書きしるせ、今から後、主にあって死ぬ死人は幸いである。』御霊も言う、『しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく。』」(黙示録 14:13)

わたしはあなたになんと申し上げればよいかわからない。あなたの妻の死の知らせに圧倒され、とても信じることができなかったが、今なお信じられない。神は、先週の安息日の夜にわたしに幻を見せてくださったので、これを書くことにする。
.....

わたしは、彼女が印されて、神のみ声で出て来て、地上に立ち、14万4千の人々と共にいるのを見た。わたしたちは彼女のために嘆く必要のないことを見た。彼女は悩みの時に休んでいるのであり、ただわたしたちが悲しむのは彼女と共にいることができない自分たちの損失だけである。わたしは彼女の死がよい結果になることを見た。

わたしはFと遺された子供たちにイエスに会う備えをするようにと警告する。そうすれば、彼らは自分たちの母親に再会し、二度と別れることはないのである。ああ、子供たちよ、あなたがたは彼女があなたがたと共にいた時に与えた忠実な警告に心を留め、彼女があなたがたのために神にささげた祈りをみな地にこぼした水のように無駄にすることはしないであろうか。主イエスに会う準備をしなさい、そうすれば万事良しである。神にあなたがたの心を捧げなさい。そして、一日たりとも自分が主イエスを愛しているかを確かめずに床についてはならない。愛する兄弟、わたしたちは、神があなたの帯を締め、孤独感に耐えるように強めて下さるように神に祈った。神はあなたと共におられ、支えて下さる。ただ信仰を持ちなさい。.....

希望のない人々のように悲しんではならない。墓が彼女をとどめておけるのは、短い間に過ぎない。親愛なる兄弟、神にあって希望をいだき、元気を出しなさい、そうすればまもなく、あなたの妻と会うようになる。わたしたちはあなたとあなたの家族に神の祝福がとどまるように祈ることをやめない。神はあなたの太陽となり、盾となられる。神はこの深い悲しみと厳しい試みの中で、あなたがたの傍らに立つておられる。試練によく耐えなさい。そうすれば、あなたはイエスの再臨のときに、伴侶と共に栄光の冠を受けることになる。真理をしっかりとつかみなさい。そうすれば、あなたは彼女と共に栄光と誉れと不死と永遠の命に冠されるようになる。(ヘブレイク・メッセージ 2巻 263, 264)

死すべきものにすぎない人間

「人は神の前に正しくありえようか。人はその造り主の前に清くありえようか。」(ヨブ 4:17)

人間は死すべきものにすぎず、自らあまりに賢くイエスを受け入れることはできないと感じているあいだは、死すべきもののままである。(サインズ・オブ・タイムズ 1912 年 2 月 13 日)

身体上の命は……永久的でも不死のものでもない。なぜなら命の賦与者である神が、再びそれをお取りになるからである。人には自分の命への支配力はない。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホット・コメント] 5 巻 1130)

神の御言は人の魂が不死のものであるとはどこにも教えていない。不死は神のみが持っておられる特性である。(教会への証 1 巻 344)

死者に意識があるという教理は、靈魂不滅という根本的な誤りに基づくものである。そしてこの教理は、永遠の責め苦という教えと同様、聖書の教えに反するものであり、理性の命じるところにも、人間の慈悲の心にも、相反するものである。……こうしたことについて、聖書はなんと言っているであろうか。ダビデは、人間が死んだならば、意識はないと声明している。「その息が出て行けば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」(詩篇 146:4)。……

ヒゼキヤの祈りに答えて、彼の生命が十五年延ばされたとき、感謝にあふれた王は、神の大いなるあわれみに対して讃美の言葉をささげた。彼は、この歌の中で、彼の大きな喜びの理由を挙げている。「陰府は、あなたに感謝することはできない。死はあなたをさんびするすることはできない。墓にくだる者は、あなたのまことをのぞむことはできない。ただ生ける者、生ける者のみ、きょう、わたしがするように、あなたに感謝する」(イザヤ 38:18, 19)。一般にゆきわたっている神学は、死んだ義人は天国の喜びにあずかり、朽ちることのない舌で神を賛美していると言うのである。しかし、ヒゼキヤは死にあたって、そのような輝かしい期待を持つことはできなかった。……

ペテロは、ペンテコステの日に、ダビデについて、「彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている」「ダビデが天にのぼったのではない」と言明した(使徒行伝 2:29, 34)。ダビデが復活の時まで墓の中にとどまっていると言う事実は、義人は死んだ時に天にいくのではないということを証明している。復活を経ることによってはじめて、そしてキリストの復活の事実の功績によって、ダビデが、ついに神の右に座することができるのである。(各時代の大争闘下巻 296, 297)

死における人間の状態

「生きている者は死ぬべきことを知っている。しかし死者は何事をも知らない、またはや報いを受けることもない。その記憶に残る事柄さえも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。」(伝道の書 9:5, 6)

霊魂不滅説は、ローマが異教から借りてきて、キリスト教の中に織り込んだ偽りの教理のひとつである。マルチン・ルターは、これを「ローマ法王の教書というはきだめの一部をなす奇怪な作り話」であると言っている。伝道の書の中にある「死者は何事をも知らない」というソロモンの言葉に注を加えて、ルターはこう言っている。「……死者は全く何も感じないで眠っていると、ソロモンは判断している。死者は、日も年も数えることなく横たわっている。しかし目がさめる時には、ほんの一瞬眠ったか、というほどにしか思わないであろう。」(各時代の大争闘下巻 301,302)

殉教者ティンダルは、死者の状態について次のように言明した。「わたしは、彼らがすでにキリストのような、あるいは、神に選ばれた天使たちのような、完全な栄光に入っているとは考えていないことを、はっきり申し上げる。わたしは信仰の上から、そうは思わないのである。なぜならば、もしそうであるとする、肉体の復活を説くことはむだであるとしか思わないからである。」(同上 298)

一般に信じられているところによれば、贖われて天にある者たちは、地上で起きるすべてのことを、そして特に、彼らがあとに残してきた友人たちの生活を、よく知っているというのである。しかし、死者が、生きている人々の悩みを知り、……彼らが人生のあらゆる悲哀、失望、苦悩に耐えるのを見ることが、どうして幸福の源となり得ようか。……また、息が絶えるとすぐに、悔い改めなかった者の魂が地獄の炎の中に投げ込まれるという考えは、なんと嫌悪すべきものであろうか。自分たちの友人が、不用意のまま墓にくだり、永遠の苦悩に陥るのを見る人々は、どんなに激しい苦しみを味わうことであろうか。このような悲惨なことを考えて、気が狂った者も多いのである。(同上 296)

キリストは、信じる子らにとって死は眠りであると言っておられる。彼らの生命はキリストと共に神のうちにかくれているのであって、最後のラッパが鳴りわたるときまで、死ぬ者はキリストのうちに眠るのである。(各時代の希望中巻 341)

神の正義にあるいつくしみ深さ

「また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。」(マタイ 10:28)

悪人が死ぬと永遠の焦熱地獄において火と硫黄とをもって苦しめられるという教理や、この短い地上の生涯において犯した罪のために、神が生きておられるかぎり責め苦を受けるという教理は、愛とあわれみの感情や正義感から見て、実にいまわしいかぎりである。……

神の言葉のどこに、そのような教えが見出されるであろうか。贖われて天にある者たちは、あらゆるあわれみと同情の念を失い、普通の人間の感情さえ持たなくなるであろうか。彼らは禁欲主義者のように無関心になり、殺人者のように残酷になるであろうか。いや、そうではない。こうしたことは、神の書の教えではない。……

この永遠責め苦説は、バビロンがすべての国民に飲ませる憎むべき偽りの教理の一つである。(各時代の争闘下巻 283～285)

サタンが神の品性をどんなに誤った色彩で彩ってきたかを考えるとき、人々が恵み深い創造主を恐れ、憎みさえするのも、不思議ではないのである。(同上)

救い主が教え、模範を示された、思いやりとあわれみと愛の原則は、神のみこころと品性の写しである。……神は悪人を処罰されるが、それは宇宙の幸福のためであり、処罰が下される本人たちの幸福のためでもある。……

サタンを指導者とし、その力に支配されてきた者は、神の前に出る用意がない。……

果たして彼らは、神と小羊の栄光に耐え得るであろうか。いや、それはできないのである。彼らには天国のために用意をするように幾千もの機会が与えられていた。にもかかわらず、彼らは純潔を愛するように心を訓練しなかった。彼らは、天国の言語を学ばなかったのも、今となってはもうおそすぎたのである。(同上 285～293)

罪にとって、それがどこに見出されようと、「わたしたちの神は、実に焼き尽くす火である」(ヘブル 12:29)。神のみたまは、その力に服するすべての者のうちにあって、罪を焼き尽くす。しかしもし人が罪に執着するなら、その人は罪と一体となる。そのとき罪を滅ぼす神の栄光は、当然その人も滅ぼしてしまうのである。(各時代の希望上巻 110)

悪人の受ける分

「見よ、すべての魂はわたしのものである。父の魂も子の魂もわたしのものである。罪を犯した魂は必ず死ぬ。」(エゼキエル 18:4)

義人の嗣業は生命であるが、悪人が受ける分は死である。(各時代の斗争闘下巻 294)

罪を犯した魂は永遠に死ぬ、それは復活の希望のない永遠の死である。そして、神の怒りは静められる。(初代文集 120)

サタンが「罪を犯した魂は必ず死ぬ」という神のみことばを、罪を犯した魂は死ぬことはなくて、苦しみの中に永遠に生きるのだというように、人々にうまく信じ込ませていることは、驚くばかりである。天使は言った「苦痛であろうが幸福であろうが、生命は生命である。死には苦痛もなければ、よろこびもなく、また憎しみもない」と。(同上 362)

キリストは、わたしたちが命を持つことができるように、最も屈辱的な状況の下に苦悩の死をしのばれた。このお方は死を征服するために、ご自分の尊い命をお与えになった。しかし、このお方は墓からよみがえられ、このお方がお捨てになった命を取り戻されるのを見るために来た天使たちは、このお方がヨセフの裂かれた墓の上に立って、「わたしはよみがえりであり、いのちである」と宣言される勝利の喜びの言葉を聞いたのであった(ヨハネ 11:25)。

「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」(ヨブ 14:14) との質問に対する答えが与えられた。キリストは罪の刑罰を負い、墓にくだることによって、信仰のうちに死ぬすべての者のために墓の中を明るくされた。人のかたちをとってこられた神は、福音を通して命と不死を明るみに出された。キリストは、死ぬことによって、ご自分を信じるすべての者のために永遠の命を獲得されたのである。このお方は、死ぬことによって、罪と不忠誠の創始者が罪の刑罰、すなわち永遠の死を受けるように有罪宣告を下されたのである。

永遠の命の所有者にして、与え主であられるキリストは、死に勝つことのできる唯一のお方であられた。このお方がわたしたちの贖い主であられる。(教会への証 6 巻 230, 231)

キリストは命そのものである。死の力を持つ者を滅ぼすために、死を経験された方は、あらゆる活力の源であられる。ギレアデには乳香があり、医者がおられる。(同上)

靈魂不滅という偽り

「偽りの舌をもって宝を得る者は、吹き払われる煙、死のわなである。」(箴言 21:6)

エデンの園において、サタンがエバに語った「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」との最初の大欺瞞は、靈魂不滅に関して説いた最初の説教であった。この説教は大成功し、恐ろしい結果を引き起こした。彼は人々がその説教を真理として受け入れ、牧師たちがそれについて説き、歌い、また祈るように先導した。(教会への証 1 巻 342)

サタンは、人類の墮落後、部下の天使たちに命じて、人間は生まれながらに不死であると信じこませるように努力させた。まずこうしたまちがった考えを受け入れさせておいて、罪人は永遠の不幸の中に生きなければならないものであると思い込ませるのである。そして今度は、暗黒の君は、その部下を使って、神は執念深い暴君であるかのようにみせかけ、神のみこころを喜ばせない者はすべて地獄に投げ込まれ、永遠に神の怒りを受けねばならないのだと断言……する。

……

永遠の責め苦の教理を嫌悪する多くの人々は、これと反対の誤りに追い込まれる。聖書には神は愛とあわれみに満ちたおかたとして示されているので、被造物を永遠の焦熱地獄に投げ込むとは信じることができないのである。しかし、魂はもともと不死であると信じられているので、全人類はついには救われると結論するほかないのである。聖書に恐ろしいことが記されていても、それは単に人を服従させるためのおどしであって、文字どおりに実現はしないと思っている人が多い。こうして、罪人は利己的な快楽を楽しみ、神の律法を無視しても、ついには神の恵みにあずかることができるということになる。……

神は、神の品性と神が罪を処理される方法とを、人間に宣言された。……「主は……悪しき者をことごとく滅ぼされます」(詩篇 145:20)。……しかし、あらゆる応報、処罰の執行は、恵み深く忍耐強い、慈悲に富んだおかたとしての神の品性と完全に調和するのである。……

そして、神のこうした性質について正しい理解を持つものはみな、神の特性に感嘆して神にひきつけられ、神を愛するようになるのである。(各時代の大争闘 下巻 282, 285, 286, 291)

今は神の時である

「神はこう言われる。『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた。』見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」(コリント第二 6:2)

神は、生物のためだけでなく、自然のすべての営みを支配するために、法則をお定めになった。万物は、破ることのできない一定の法則の下にある。……

天使と同様に、エデンの住人には、試験期間が与えられていた。彼らの幸福な地位は、創造主の律法に忠実に従うという条件だけによって保つことができた。彼らは、服従して生きるか、それとも服従しないで滅びるかのどちらかであった。神は、彼らを豊かな祝福を享受する者とされた。しかし、もし彼らが神の意志に逆らうならば、罪を犯した天使たちを許さなかったかたは、彼らをも許すことはおできにならなかった。罪は神の賜物を取り去り、彼らに悲惨と破滅をもたらすのであった。(人類のあけぼの上巻 38)

アダムとエバは神の律法を犯した。これによって、彼らはエデンから追放され、命の木から遠ざけられなければならなかった。罪人がそれを食べれば、罪は永遠に続くことになるのであった。

罪を犯したことによって、死が世界に入ったのである。しかし、キリストは、人類にもう一度試験期間を与えるために、ご自分の命を与えられたのである。彼は神の律法を廃止するためではなく、人類に第二の恩恵期間を獲得するために、十字架上で死なれたのである。キリストは死を不死の性質にするために死なれたのではない。彼が死なれたのは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を滅ぼす権利を獲得するためであった。(牧師への証 133, 134)

人間は死後に魂の救いを得ることは不可能である……この世は、永遠のために備えをするために人々に与えられた唯一の期間である。(キリストの実物教訓 239)

恩恵期間はすべての者に与えられた。それは、すべての者が永遠の命のために品性を築くためである。死か命か、いずれかに決定するために、すべての者に機会が与えられるのである。……

罪の生活を続け、提供された大いなる救いを無視することを選んだ者の恩恵期間は、キリストが天の雲に乗って再臨される直前に天でキリストの奉仕が終わる時に、閉ざされる。(教会への証 2 巻 691)

今は恵みの時である。今は救いの時である。今、今こそが神の時なのである。(同上 102)

初穂であられるキリスト

「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みを抱いているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中でもっともあわれむべき存在となる。しかし、事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中から、よみがえったのである。」(コリント第一 15:19, 20)

キリストは眠った者の初穂として死人の中からよみがえられた。彼は揺祭のたばの本体であって、そのよみがえりは揺祭のたばが主の前にささげられる日に起こった。千年以上のあいだ、この象徴的な儀式が行われてきた。収穫の畑から、熟した穀物の初穂が集められ、人々が過越節のためにエルサレムに行ったとき、その初穂のたばは主の前に感謝のささげ物としてふられた。これがささげられるまでは、作物にかまを入れ、それを集めてたばにはならなかった。神にささげられた束は収穫を象徴していた。そのように初穂なるキリストは、神の王国に集められる霊的大収穫の象徴であった。キリストのよみがえりはすべての死せる義人のよみがえりの型であり保証である。(各時代の希望下巻 316)

イエスの復活は、主にあって眠るすべての人の最後のよみがえりの型であった。よみがえられた救い主のお体、ふるまい、言葉の抑揚はみな弟子たちのよく知っているものであった。イエスにあって眠る者も同様に再びよみがえるのである。弟子たちがイエスを知っていたように、わたしたちは友人たちがわかるのである。彼らは、この世では不具だったり、病気だったり、みにくかったりしたかもしれないが、よみがえらされた栄光の体のうちにあっても、彼らの個性は完全に保存されており、わたしたちはイエスのお顔から輝きで出る光によって輝く、愛する者たちの顔かたちを認めるのである。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホット・コメント] 6 巻 1092)

救い主の……再臨の時にはすべての死せるとうい人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命にはいるのである。キリストを死人の中からよみがえらせたのと同じ力が、教会をよみがえらせ、これに「すべての支配、権威、勢力、権勢、……また、この世ばかりでなく来るべき世においても唱えられる、あらゆる名」にまさって、キリストと共に栄光をさずけるのである(エペソ 1:21)。(各時代の希望下巻 319)

このお方はわたしたちを誉れのうちに受け入れてくださる。わたしたちに消えさせることのない栄光の冠が与えられる。(サインズ・オブ・タイムズ 1902 年 7 月 9 日)

勝利にのまれる死

「この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである」(コリント第二 5:4)

命の賦与者が墓のかせを砕くために来られる。彼は捕らわれた者を連れ出し、「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言される。(SDA バイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 6 巻 1093)

死ねば、義人は天に行き、悪人は罰せられるというようなことは聖書のどこにも書いていない。父祖たちや預言者たちは、そのような確証を残さなかった。キリストと弟子たちは、そのような暗示はなにも与えなかった。死人がすぐに天に行くことはない、聖書は明らかに教えている。彼らは復活まで眠っていると言われている。銀のひもがとけ、金の皿が砕けるときに、人の思いは滅びるのである。墓に下る者は、沈黙のうちにある。日の下に行われていることは何事も知らない。疲れた義人にとって、それは幸福な休息である。時は長かろうと短かろうと、彼らにとってはほんの一瞬にすぎない。彼らは眠っているのである。そして、神のラッパによって呼び起こされて、輝く不死が与えられるのである。「というのは、ラッパが響いて、死人が朽ちないものによみがえらされ、……この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。『死は勝利にのまれてしまった』」(コリント第一 15:52～54)。深い眠りから目覚めたときに、彼らは、考えることをやめたところから考え始める。最後の感覚は死の苦痛であった。最後の思いは、自分は死の力に屈するのだ、ということであった。しかし彼らが墓から起き上がるときに、彼らの最初の喜ばしい思いは、「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか」という勝利の叫びとなって響くのである(コリント第一 15:55)。(同上 549, 550)

死の苦痛は、彼らの最後に感じたものであった。……彼らが目覚めるとき、痛みはまったく去っている。……神の都の門は広く開け放たれ、……神に贖われた者たちはケルビム、セラピムの立ち並ぶ門を通して入るのである。キリストは彼らを歓迎し、「よい忠実な僕よ、よくやった。……主人と一緒に喜んでくれ」との祝福の言葉をかけてくださる(マタイ 25:21)。(今日のわたしの生涯 349)

特別復活

「また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目を覚ますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱を受ける者もあるでしょう。」(ダニエル 12:2)

神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。太陽がその力強い光を放って現れる。しるしと不思議とがあとからあとから現れる。悪人たちはこの光景を、恐れと驚きとをもってながめる。一方義人たちは、自分たちの救いの前兆を厳粛な喜びで迎える。自然界の万物は、それぞれの軌道からはずれたように見える。川の流れは止まる。黒い厚い雲が現れて、互いに衝突する。この怒ったような天の真ん中に、一ヶ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があつて、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、「事はすでに成った」と告げるのである(黙示録 16:17)。

その声が天と地とを振動させる。大地震が起こる。「それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった」(同上 16:18)。……全地は海の波のように降起し揺れ動く。地の表面は砕け散る。地の基そのものが崩れつつあるように見える。……

墓が開かれる。「地のちりの中に眠っている者の……多くの者は目を覚ますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱を受ける者もあるでしょう」(ダニエル 12:2)。第三天使のメッセージを信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。(各時代の大争闘下巻 414、415)

第三天使のメッセージを信じ、安息日を守って死んだ人々は、栄化された姿で土の寝床から現れた。(初代文集 460)

「彼を刺しとおした者たち」(黙示録 1:7)、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民とに対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまとわれたキリストをながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉を見るために、よみがえらせられる。……

天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。……神の安息日をきよく守ることによって神をあがめてきた者たちに、祝福が宣言されると、勝利の力強い叫びが起こる。(各時代の大争闘下巻 415、418)

不死へのよみがえり

「わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあつて眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。」(テサロニケ第一 4:14)

信じる者にとって、キリストはよみがえりであり、いのちである。罪のために失われたいのちは、われらの救い主のうちに回復される。なぜなら、キリストはご自身のうちにいのちをもっておられて、みこころのままに人をよみがえらせられるからである。主は不死を与える権利を受けておられる。キリストは人性のうちにあつてお捨てになったいのちを、ふたたびとりあげて人類にお与えになる。(各時代の希望下巻 318)

キリストが忠実であつた者をご自分のみもとに集めるために来られるとき、最後のラッパが鳴り響き、全地は最高の山々の頂きから最も深い鉱坑の角々まで聞くのである。死せる義人は最後のラッパの音を聞き、墓から出てくる。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 柯什・コメント] 7 巻 909)

どの人もみな、墓に入ったときと同じ身長で墓から現れる。よみがえった群衆の中に立っているアダムは、背が高く堂々たる容姿で、神のみ子より少し低いだけである。彼は後世の人々とは、著しい対象を示している。この点からでも、人類の大きな退化がわかる。しかし、どの人もみな、永遠の若さの新鮮さと活力にあふれてよみがえる。……一度罪に汚されてしまつて美を失い、死ぬべき、朽ち果てるべきものとなった体が、完全な、美しい、不死のものとなる。……贖われた者は、長い間失われていたエデンのいのちの木にふたたび近づくことを許され、最初の栄光に輝く人類に完全な背丈に「成長する」のである。……

生きている義人たちは、「またたく間に、一瞬にして」変えられる(コリント第一 15:52)。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒とともに、空中において主に会うために引き上げられる。……小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌をうたいながら、ともに神の都へ上っていく。(各時代の大争闘下巻 424)

義人アベルから最後に死んだ聖徒に至るまですべての尊い死者は、栄光ある不死の命によみがえる。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 柯什・コメント] 5 巻 1110)

罪に定められるための復活

「悪を行う者は、断ち滅ぼされ、主を待ち望む者は国を継ぐからである。」(詩篇 37:9)

千年の終わりに第二の復活がある。その時に、悪人はよみがえらせられる。そして、……神の前に現れる。こうして、黙示録の記者は、義人の復活を描写したあとで「それ以外の死人は、千年の期間が終わるまで生きかえらなかった」と言っている(黙示録 20:5)。(各時代の大争闘下巻 445)

第一の復活にあずかった人々は、若々しい不死の姿で現れたのに、第二の復活には、どの人にもものろいの跡がみられた。地の王たちや貴族たち、卑しい者たち、学問のある人ない人、みな一緒に出てきた。だれもがみな人の子を仰いで見た。キリストをあざけり軽んじた人々も、その聖なる額にいばらの冠をかぶせた人々も、彼を葦で打ちたたいた人々も、みな王者の威厳をそなえられたキリストを仰いで見た。このお方の裁判の時にイエスにつばきをはきかけた者は、いまイエスの刺し通すような眼光とみ顔の栄光から顔をそむける。イエスの手と足に釘を打ちこんだ者は、いまそのはりつけの跡を目の前に見る。イエスのわき腹をやりで刺した者は、そのおからだに自分たちの残酷な跡を見る。彼らはみな、いま目の前にあるお方こそ、自分たちがはりつけにし、その死の苦しみを愚弄したイエスその人であることを知って、苦悶の長いうめき声をあげ、王の王、主の主なるキリストの前からのがれようとする。

みんなは、岩の間に逃げこんで、かつて自分たちがあざけたイエスの、恐るべき栄光から身をかくそうとする。彼らはキリストの威厳と非常に栄光に圧倒されて苦痛を感じ、声をそろえて、恐ろしいまでにはっきりと、「主の御名によってきたる者に、祝福あれ」と叫ぶ。(初代文集 469,470)

火が天の神のところから下って来て彼ら〔悪人たち〕を滅ぼし、根も枝もともに焼きつくす。サタンが根で、その子供たちが枝である。(同上 120)

悪人の運命は、彼ら自身の選択によってきまるのである。彼らが天から除外されるのは、彼らが自ら進んでそうするのであり、神の正義とあわれみによるのである。(各時代の大争闘下巻 293)

命の与え主が来られる

「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。わたしはわが服役の諸日の間、わが解放の来るまで待つでしょう。」(ヨブ 14:14)

命の与え主が、第一の復活においてご自分の買われたご自身のものを呼び起こされる。そして、そのラッパのとき、すなわち最後のラッパが鳴り響き、大群衆が永遠の勝利に出て来るときまで、眠っているすべての聖徒は安全に守られ、尊い宝として保護される。彼らの名は神に知られている。彼らが生きている間に彼らのうちに宿っていた救い主のみ力により、また彼らは神性にあずかる者であったので、死人の中から呼び出されるのである。(SDA パイブル・コメント [E.G. 711・コメント] 4 巻 1143)

この地上では、わたしたちの最も大切な希望は、しばしば挫折させられる。わたしたちの愛する者は死によってわたしたちから引き離される。わたしたちは彼らの眼を閉じてやり、墓場に送るために死装束を着せてやり、見えないところに横たえる。しかし、希望はわたしたちの心を天に向ける。わたしたちは永遠に別れるのではなく、イエスにあって眠る者たちと会うのである。彼らは敵の地から帰ってくる。命の与え主が来られる。千々万々の天使たちは主の道中、このお方につき従う。主は死のきずなを断ち切り、墓のかせを砕く。そして、捕らわれていた尊い義人たちは健康と不死の美しさをもって出てくるのである。(ユース・インストラクター 1858 年 4)

復活においては、墓に下ったときに持っていた体の組織や物質と同じではないが、わたしたちの個人的な特徴は保存されている。……復活においてはすべての人はそれぞれの品性を持っている。神がご自分で定められる時に、死人を呼び出し、命の息を与え、枯れた骨に生きるようにとお命じになる。(SDA パイブル・コメント [E.G. 711・コメント] 6 巻 1093)

そこで再び、家族の者が結ばれる。愛する者のなきがらを見ると、わたしたちは神のラッパが鳴り響き「死人は朽ちない者によみがえらされ」る朝の事を考えることができる。(コリント第一 15:52)。(レビュー・アンド・ヘルド 1906 年 11 月 22 日)

罪ののろいの最後の痕跡が取り除かれ、キリストに忠実に仕える者たちは、思いと魂と体において、主の完全な姿を反映して、「われらの神、主のうるわしき」を着て現れる。(各時代の争闘下巻 424)

わたしたちが眠りにつくとき、イエス・キリストに望みを置いて死ぬことができるように、備えができていであろうか。(今日のわたしの生涯 349)

望みのある悲しみ

「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。」（テサロニケ第一 4:13）

わたしは苦しみ悩む者に向かって、復活の朝の希望のうちにおおいに慰めを受けるようにと申し上げたい。あなたが飲んできた水は、荒野にいたイスラエルの子らにとってメラの水が苦かったように、苦いものであるが、イエスはその愛によって、それを甘い水にすることがおできになる。……

神がすべての傷のために鎮痛剤を備えてこられた。ギレアデに乳香があり、そこに医師がおられる。あなたは今こそ、かつてなかったほどに聖書を研究しないであろうか。すべての危急時において、神に知恵を求めなさい。あらゆる試練において、困難から抜け出す道を示して下さるようにイエスに嘆願しなさい。そうすればあなたの眼が開けて、治療法を見出し、み言葉の中に記録されているいやしの約束をあなたの問題に適用することができる。このようにすれば、敵はあなたを悲しみと不信仰に導く方法を見出すことができないばかりか、かえってあなたは主にあつて信仰と希望と勇氣とを持つようになる。悲しみの解毒剤として、またあなたの唇におかれた一つ一つの苦い杯に対するいやしの杖として働くすべての祝福を認めて、自分のものとすることができるように、聖霊があなたに明確な識別力を与える。すべての苦い杯はイエスの愛と混ぜ合わされるようになり、あなたは苦さをつぶやく代わりに、イエスの愛と恵みが、悲しみと混ぜ合わされるので、それが和らげられたきよい聖化された喜びとなったことを認めるのである。

わたしたちの長男ヘンリー・ホワイトが危篤の状態で病床に横たわっていたとき、彼は「苦痛の病床は、イエス様のご臨在があるとき、尊い場所である」と言った。わたしたちは苦い水を飲むことを余儀なくされるとき、その苦さから尊い明るい面に向きを変える。試練において、恵みが人の魂に確証を与えることができる。わたしたちが死の床の傍らに立って、いかにクリスチャンが苦しみに耐え、死の陰の谷を通ることができるかを見るとき、わたしたちは力を得……そして、わたしたちは魂をイエスに導くことに失敗すること、失望することもないのである。（*セゲット・メッセージ* 2 巻 273, 274）

永遠の命の始まる時

「そのあかしとは、神が永遠の命をわたしたちに賜り、かつ、その命がみ子のうちにあるということである。み子を持つ者は命を持ち、神のみ子を持たない者は命を持っていない。」(ヨハネ第一 5:11, 12)

イエスは……「わたしはよみがえりであり、命である」と宣言された(ヨハネ 11:25)。キリストのうちには、借りたものでもなければ、ほかから由来したものでもない、本来の生命がある。「御子を持つ者はいのちを持」つ(ヨハネ第一 5:12)。キリストの神性は、永遠の生命についての信者の確信である。「わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」とイエスは言われた(ヨハネ 11:25, 26)。(各時代の希望 中巻 345, 346)

信じる者には、死は小事にすぎない。キリストは、それをたいしたことではないかのように語っておられる。「もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう。……わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろう」(ヨハネ 8:51, 52)。クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、「キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう」(コロサイ 3:4)。(同上下巻 318)

まもなくご自分が十字架上に死のうとしておられたキリストは、よみの征服者として死の鍵をもって立ち、永遠の生命を与える権利と権力を主張された。(同上中巻 346)

またイエスは、「わたしはその人々を終わりの日によみがえらせるであろう」と言われた(ヨハネ 6:40)。キリストは、われわれがキリストと一つ精神になるために、われわれと一つ肉体になられた。われわれが墓から出てくるのは、この結合によるのである。すなわちキリストの力のあらわれとしてだけでなく、信仰によってキリストのいのちがわれわれのものとなったからである。キリストの真の品性を見、キリストを心に受け入れる者は、永遠のいのちを持つ。キリストがわれわれのうちに住まれるのは、みたまを通してであり、神のみたまが信仰によって心に受け入れられるとき、それは永遠のいのちの始まりである。(同上 135, 136)

イエスはいまもこう叫んでおられる。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」。「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」。「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」(ヨハネ 7:37; 黙示録 22:17; ヨハネ 4:14)。(同上 235)

研究 14

最後の出来事



千年期

Millennium

今回はすべての魂の運命が決定された後の状態について研究したいと思います。

「このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう」（ヨハネ 5:28, 29）。

「それからヨベルの年がはじまり、土地は休まねばならなかった。わたしは、神を敬う奴隷が勝利と歓喜の中に立ち上がって、身をしばりつけていた鎖を振り落と…（す）のを見た」（初代文集 460）。

1. 再臨

「また見てみると、見よ、白い雲があつて、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、『かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた』。雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた」（黙示録 14:14 ～ 16）。

2. 義人の復活

「地がよろめき、いなずまがひらめき、雷がとどろく真ただ中で、神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こす。イエスは義人たちの墓をごらん

なり、それから両手を天のほうへ上げて、『目ざめよ、目ざめよ、目ざめよ。ちりの中に眠る者たちよ、起きよ』と呼ばれる。地の長きと深きにわたって、死者はその声を聞き、聞く者は生きる。そして、全地に、あらゆる国民、部族、国語、民族からなる大群の足音が鳴り響く。『死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか』と叫びながら、彼らは死の獄屋から、不死の栄光をまとうて現れる（コリント第一 15:55）。そして、生きていた聖徒たちとよみがえった聖徒たちとはともに声をあわせて、勝利の長い喜びの叫びをあげる」（各時代の斗争闘下巻 423, 424）。

3. 義人の昇天

「生きている義人たちは、『またたく間に、一瞬にして』変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちと共に、空中において主に会うために引き上げられる。…小さい子供たちは、天使たちに抱かれてきて、母親の腕に返される。長く死に別れていた友人たちは再会して、もう永久に別れることなく、喜びの歌を歌いながら、共に神の都へと上っていく。…神の都に入る前に、救い主は、ご自分に従う者たちに、勝利の象徴を与え、王族のしるしを授けてくださる。…あがなわれた群衆の前には、聖都がある。イエスは、真珠の門を広くあけられる。そして、真理を守ってきた諸国の民がその中へ入る。…ここで、『あなたがわたしに賜わった人々が、わたしのいるところと一緒にいるようにして下さい』と弟子たちのために祈られた救い主の祈りが成就する。キリストは、ご自分の血によって贖われた者たちを、『その栄光のまえに傷なき者として、喜びのうちに』父の前に示し（ユダ 24）、『わたしはここにおります。そして、あなたがわたしに下さった子供たちもおります。』『あなたがわたしに下さったものを、わたしは守りました』と言われる。ああ、なんという驚嘆すべき贖いの愛であろう。無限なるおかたであられる天父が、贖われた者たちをごらんになって、罪による不調和が消え、罪ののろいが除かれ、人性が再び神性と調和して、そこに神のみかたちをごらんになる時の、その喜びはどんなであろう」（各時代の斗争闘下巻 424～427）。

4. 悪人の死（滅亡）

「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほ

ら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとからかくまってくれ』（黙示録 6:15, 16）。

『『そこで、彼らは宮の前にいた老人から始めた』と預言者は言っている（エゼキエル 9:1 ～ 6）。滅びの働きは、人々の霊的保護者と称してきた人々から始められる。偽りの夜回りがまず第一に倒れる。あわれんだり助けたりする者はない。老若男女がみな滅ぼされる』（各時代の大争闘下巻 439, 440）。

5. 地上の荒廃

「キリストが来られる時、悪人は、全地の表面から一掃される。すなわち、主イエスの口の息によって殺され、来臨の輝きによって滅ぼされる。キリストはご自分の民を神の都へ連れて行かれ、地には住民はいなくなる。『見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。』…全地は荒涼たる荒野のように見える。地震によって破壊された都市や村落の廃虚、根こそぎにされた木々、海から投げ出されたり、地中から引き裂かれたごつごつした岩石が、地の表面にちらばっている。一方、広いほら穴は、山々がその基から裂けてしまった跡を示している」（各時代の大争闘下巻 440, 441）。

「わたしは地を見たが、それは形がなく、またむなしかった。天をあおいだが、そこには光がなかった。わたしは山を見たが、みな震え、もろもろの丘は動いていた。わたしは見たが、人はひとりもおらず、空の鳥はみな飛び去っていた。わたしは見たが、豊かな地は荒地となり、そのすべての町は、主の前に、その激しい怒りの前に、破壊されていた」（エレミヤ 4:23 ～ 26）。

6. サタンの幽閉

「ここで、贖罪の日の最後の厳粛な務めに予表されていた事件が起こる。至聖所における務めが完了して、イスラエルの罪が、罪祭の血によって聖所から除かれたときに、アザゼルの山羊が生きたまま主の前に連れて来られた。そして、大祭司は、会衆の前で、『イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白し』た（レビ記 16:21）。それと同様に、天の聖所における贖罪の働きが完了したときに、神と天使たちと贖われた人々の群れとの前で、神の民の罪が、サタンの上におかれるのである。彼が神

の民に犯させたすべての罪惡の責任が、彼にあることが宣言される。アザゼルの山羊が、人里離れた地に送り出されたように、サタンは、住む者もない荒涼たる荒野と化した地上に追放される」(各時代の大争闘下巻 441)。

「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手持って、天から降りてきた。彼は、惡魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた」(黙示録 20:1～3)。

「今となつては、惡人たちでさえ、サタンの力の及ばないところに置かれている。サタンは惡天使たちとだけ取り残され、罪がもたらしたのろいの結果を悟る。…千年の間、サタンは、荒れ果てた地上をさまよい歩いて、自分が神の律法に反逆した結果をながめる。この間のサタンの苦しみは非常なものである。サタンは、墮落して以来、たえず働き続けて、反省するひまがなかった。ところが今は、力を奪われ、最初に天の政府に反逆して以来自分がどんな事をしてきたかを熟考させられる。そして彼は、恐ろしい将来を思つてふるえおののく」(各時代の大争闘下巻 443)。

7. 聖徒は世を裁く

「また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた」(黙示録 20:4)。

「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する」(黙示録 20:6)。

「それとも、聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか」(コリント第一 6:2)。

「あなたがたは知らないのか、わたしたちは御使たち(サタンと惡天使たち:各時代の大争闘下巻 444, 445)をさえさばく者である」(コリント第一 6:3)。

「主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たちを、大いなる日のさばきのために、永久にしばらくつめたまま、暗やみの中に閉じ込めて置かれた」(ユダ 6)。

「キリストは、ご自分の民とともに、死せる惡人を裁かれた。彼らは、惡人たちの行為を、法令の書すなわち神のみ言葉に照らしあわせて、その行つたわざに

したがって各々に判決をくだした」(初代文集 468)。

「法規の書すなわち聖書と照らし合わせ、それぞれのなしたわざに従って、すべての者に判決を下す。その時、悪人は、それぞれのわざに応じて、受けねばならない苦しみが定められる。そして、それが、死の書の彼らの名のところに記録される」(各時代の大争闘下巻 444)。

8. 千年期の後

a) キリストの来臨

「千年期の終わりに、キリストは再び地上に帰って来られる」(各時代の大争闘下巻 446)。

「千年期の終わりに、死せる悪人たちの審判が終わると、イエスは聖徒たちと天使の大軍をひきつれて都を出発された」(初代文集 468, 469)。

b) 聖なる都(新エルサレム)が天からこの地上に下って来る

「イエスがある大きな山(ゼカリヤ 14:4, 5, 9)の上におり立ち、足を地面につけられると同時に山は裂けて大いなる平地となった。そのとき上を仰いでみると、…大いなる美しい都が見られた。都は、目もくらむばかりにまぶしく照り輝く栄光のうちに、イエスが備えられた大いなる平地に落ちついた」(初代文集 469)。

c) 第二の復活

「彼は、恐るべき威光をもっておくだりになる時、死んだ悪人たちに、さばきの執行を受けるためによみがえるよう命じられる。彼らは、海の砂のように、無数の大群となって現われる。…ところが悪人たちは病気と死の跡を帯びている。…悪人たちは、墓に下った時と同じに、キリストに対する憎悪と反逆精神をもって現われてくる。彼らは、過去の生涯の欠点を除くための新しい恩恵期間を与えられるのではない。たとえ与えられても、なんの益もないであろう。罪の一生は、彼らの心をやわらげなかった。たとえ第二の恩恵期間が与えられたとしても、第一の恩恵期間の場合と同じように、神のご要求を回避し、神に対する反逆を引き起こすだけである」(各時代の大争闘下巻 446, 447)。

「彼らは囚人が土ろうの中に集められるように集められて、獄屋の中に閉ざされ、多くの日を経て後、罰せられる」(イザヤ 24:22)。

d) サタンは解放される

「千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ開放されることになっていた。…千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される」(黙示録 20:3, 7)。

e) 悪人の招集

「…地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために招集する。その数は、海の砂のように多い」(黙示録 20:8)。

「今やサタンは、主権をめざして最後の大なる戦いの準備をする。…悪の君は…大争闘に負けてはならないと決心する。…悪人たちはサタンのとりこである。キリストを拒んだことによって、彼らは反逆の指導者の支配を受け入れたのである。彼らは簡単にサタンのそそのかしを受け入れ、その命令に従う。……サタンは悪天使たちと相談し、それからさらに王侯、征服者、有力者たちと相談する。彼らは、味方の勢力と数をながめて、これに比べれば聖都の中の軍勢は少数だから打ち負かすことができると断言する。彼らは新エルサレムの富と栄光を手に入れようと計画を立てる」(各時代の争闘下巻 447～449)。

f) 戦闘準備

「その巨大な軍隊の中には多くの技術者がいて、彼らはあらゆる種類の武器をつくる。それからサタンを将として大軍が行動を起こす。王や戦士たちがサタンのすぐあとに従い、群衆はそれぞれ隊をなしてつき従う。各隊には指揮者がいて、彼らは整然と、神の都を目指して、荒廃したでこぼこな土地を進軍する」(初代文集 471, 472)。

g) サタンの大軍による都の包囲

「イエスのご命令によって新エルサレムの門は閉じられ、サタンの大軍は都を包囲して、突撃の態勢をとる」(各時代の争闘下巻 449)。

h) キリストの戴冠式

「今、キリストは、再び敵から見えるところに姿を現わされる。…『キリストの』み座のいちばん近くには、かつてサタンのわざに熱心であったが、火の中からの燃えさしのように取り出されて、深い熱心な献身をもって救い主に従ってきた者たちがいる。その次には、虚偽と不信仰のただ中であってキリスト者の品性を完成した者たち、キリスト教界が神の律法は無効であると宣言した時にも律法を尊重した人たち、さらに、各時代にわたり、信仰のために殉教した無数の人たちがいる。…だれひとり、自分自身の力と善行で勝利したかのように救いを自分の手柄にする者はいない。自分のしたことや苦しんだことについては一言もふれないで、どの歌の主旨もどの賛美の基調音も、『救いはわれらの神と、小羊のものである』と言うのである。…

天と地の全住民が集合している前で、神のみ子の最終的な戴冠式が行なわれる」(各時代の大争闘下巻 449, 450)。

「背が高く威厳に満ちた容姿の一人の天使がキリストの頭に冠をのせる」(各時代の大争闘下巻 455)。

i) 記録の書が開かれる

「また、死んでいた者が、大いなる者も小さい者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれた…そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた」(黙示録 20:12, 13)。

「記録の書が開かれ、イエスの目が悪人たちの上にそそがれるやいなや、彼らはこれまでに犯した罪の一つ一つを意識する。…すべてのことが、ちょうど火の文字で書かれているかのように現わされる」(各時代の大争闘下巻 451)。

j) 救いの計画の場面

「御座の上に十字架が現わされる。そしてちょうどパノラマの光景のように、アダムの誘惑と墮落の場面、救いの大いなる計画における一步一步が、次々に示される。…」(各時代の大争闘下巻 451)。

k) 永遠の死の宣告

「全世界の悪人たちは、天の政府に対する大反逆という罪名のもとに神の法廷に告訴される。彼らを弁護する者もなければ、言いわけの余地もない。こうして永遠の死の宣告が彼らに下される」(各時代の大争闘下巻 454)。

l) 大争闘の秘密が暴露される

「この大反逆者のねらいは常に、自分を正当化して、反逆の責任が神の統治にあることを証明することであった。…大欺瞞者サタンが、キリストを王位から退け、神の民を滅ぼし、神の都を占領しようと、最後の努力をすることにおいて、彼の正体が完全に暴露された。…神のあわれみと正義に対するサタンの非難は、今こそ沈黙させられた。…反逆の結果、すなわち神の律法を廃することの結果が、すべての知的被造物の目の前で明らかになった。…神の知恵と正義といつくしみとが、完全に擁護される。…」(各時代の大争闘下巻 456, 457)。

m) 悪人の審判と刑罰

「サタンは、神の正義を認めて、キリストの主権の前にひれ伏さずにはいられなかったにもかかわらず、彼の品性はもとのままである。反逆の精神は、奔流のように、再び爆発する。狂気の思いに満たされて、彼は大争闘に負けまいと決心する。天の王に対して最後の必死の戦いをする時が来た。…悪人たちは、…自分たちの立場が絶望的であることと、主に勝つことができないことを知っている。彼らの怒りはサタンと、サタンの欺瞞の手先であった者たちとに向けられる。彼らは悪鬼のような怒りに満たされて、彼らにとびかかる」(各時代の大争闘下巻 458)。

「見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらようになる。その来る日は、彼らを焼き尽くして、根も枝も残さない」(マラキ 4:1)。

「その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」(ペテロ第二 3:10)。

「彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都と

を包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣にせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。…それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。このいのちの書に名がしるされていない者は皆、火の池に投げ込まれた」(黙示録 20:9～11, 14, 15)。

「火が天の神のみもとからくだる。地はくずれる。地の深いところに隠されていた武器が引き出される。焼き尽くす炎が、地のすべての裂け目から吹き出す。岩石そのものが火になる」(各時代の争闘下巻 459)。

「きよめの火によって、悪人たちは根も枝もついに滅ぼされた。サタンが根であり、サタンに従う者たちが枝である」(各時代の争闘下巻 460)。

9. 新しい天と新しい地

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た」(黙示録 21:1, 2)。

「神の幕屋が人と共にあり、…」(黙示録 21:3)。

「人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」(黙示録 21:4)。

「あなたの民はことごとく正しい者となって、とこしえに地を所有する。彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ、わが栄光をあらわすものとなる」(イザヤ 60:21)。

「わたしたちの天の家郷における水晶のような川、緑の野原、風にそよぐ木々、生ける水の泉、輝かしい都、白い衣を着て歌う人たちなど…この天国の世界の美しさは、どんな画家もえがくことができず、また人間の口では言い表すことができない。『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』(コリント第一 2:9)」(ビュー・アズ・ヘラルド 1882 年 7 月 11 日)。

「あがなわれた者はだれでも、自分の一生における天使たちの奉仕を理解するであろう。生まれたときからわれわれを守ってくれた天使、われわれの歩みを見

守り、危険の日にわれわれの頭上をおおってくれた天使、死の陰の谷にあつてわれわれとともにいた天使、われわれの最後のいこいの場所に目をとめていてくれた天使、よみがえりの朝まっさきに迎えてくれる天使、—この天使と語ら…（う）ことはどんなにすばらしいことであろう。

無我の精神で働いてきた人々は、そこに自分たちのほねおりの結果を見るであろう。…そこでは神が人の魂に植えつけられた愛と同情心が最も真実に最も美しく発揮されるであろう」（教育 356 ～ 358）。

「宇宙のすべての宝は神の子らの研究のために開放される」（教育 359）。

「天は学校である。その研究の分野は宇宙であり、その教師は限りなきお方にいます神である」（アドベンチスト・ホーム 631）。

「思い出させるものがただ一つある。われわれの救い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。主の傷ついたみ頭に、その脇腹に、その手と足に、罪の残酷なしわざの唯一の跡がある。人類を神に和らがせる真紅の血潮がほとばしり出た、主の突き通されたわき腹——そこに救い主の栄光があり、そこに主の力が隠れている。…救い主の屈辱のしるしこそは、救い主の最高の栄誉である。カルバリーの傷跡は永遠にわたって、主への讃美を示し、主の力を宣言する」（各時代の大争闘下巻 462）。

完

でお祈りして、立ち上がったあと、メアリーは言いました。「お母さん、おさら洗いのゲームをしましょう。わたしは歌いながら、石けんをつけて、こすって、水ですすぐね。それから、乾(かわ) かすおさらが何まいでラックがいっぱいになるか、かぞえてみましょう。それから、乾かすためにはまた別のメロディでね!」

台所は、まもなく歌でいっぱいになり、小さな女の子はすぐに自分の問題を忘れてしまいました。おさら洗いのゲームに勝(か) って、メアリーがその勝利者(しょうりしゃ) でした。

勝利を可能にしたのは何でしょうか? 「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである」(ヘブル 11:3)。この聖句はただ、星などのことについて話しているのでしょうか?きれいにされた心にうながされて手がよごれたお皿をあらうとき、それ自体(じたい) が奇跡(きせき) のミニチュア版です! こうしたむずかしい雑用(ざつよう) をみんなゲームにしてみたらどうですか? なんととっても、もし神様の心みであれば、神様にとってなにもむずかしいことはないのですから!」

エレン・ホワイトは、かつて孤児(こじ) の男の子に手紙(てがみ) を書きました。

「あなたには学ばなければならない従順(じゅうじゅん) という教訓(きょうくん) があります。あなたは家庭のまわりにある義務(ぎむ) ー雑用(ざつよう) や小さな用事(ようじ) ーをすることは、自分をつまらないものにすると思っています。あなたは、これらの小さな要求(ようきゅう) をあからさまに嫌(いや) がっています。しかし、あなたがひどく嫌(きら) っているまさにこれらのことを好きになる心をそだてるべきです。そうするまでは、どこへいっても役に立つ助け手とはなりません。これらの必要とされている小さなことにたずさわることによって、あなたは何か大きな仕事にたずさわっているときよりももっと实际的(じっさいてき) な奉仕(ほうし) をしているのです」(教会への証 2 巻 308, 309)。

わたしたちにはみんな、向き合いたくない雑用があるものです。ですから、詩篇記者(しへんきしゃ) の祈(いの) りをまねしようではありませんか。「あなたのみむねを行うことを教えてください。あなたはわが神です。恵みふかい、みたまをもってわたしを平らかな道に導いてください。主よ、み名のために、わたしを生かし、あなたの義によって、わたしを悩みから救い出してください」(詩篇 143:10, 11)。創造主はあなたがこのお方に助けていただくなら、それができるくらい十分に大きい方です!

簡単ニラチヂミ

〔材料〕（大一枚分）

にら	2 分の 1 束
玉ねぎ	4 分の 1 個
○薄力粉	大さじ 6
○片栗粉	大さじ 3
○だし	小さじ 1
○塩	少々
○水	100cc
ごま油	大さじ 1

〔作り方〕

1. にらは 4～5cm、玉ねぎは繊維に沿って 2～3mm の薄切りにする。
2. ボウルに○を混ぜ合わせ、切った野菜を入れて混ぜる。
3. 中火のフライパンにごま油を敷いて、1 を流し入れて素早く広げたら、少し焦げ目が付くくらいカリッと両面焼けば完成です。

コツ・ポイント

※フライパンに野菜と合わせた生地を流し込んだら、固まらない間に菜箸で薄く広げる。

※片面ずつじっくり中火で軽く焦げ目が付くまでカリッと焼き上げる。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



おさら洗い ゲーム

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」（ピリピ 2:13）

「もうおさら洗いはいや！」と小さいメアリーは文句（もんく）を言いました。「外に行って遊びたいの！」

「もちろん」とお母さんは賛成（さんせい）しました。「そのための時間もあるけれど、まずこれがさきなのよ。天使（てんし）たちはきれいな台所（だいしよ）だいどころ）を見るのがさきなの。天使（てんし）たちがわたしたちのおうちで気持ちよくすごしてもらえるようにしたいでしょう？」

「はい、でもおさら洗いはしたくないの！」とメアリーは泣きました。

お母さんは、ちょっと考えていました。

「メアリー、天の神様はあなたの考えを変えることができるくらい大きい方だと思わない？」と言いました。

「神様は何でもおできになるくらい大きい方ね。」

「そのとおりよ、メアリー。このお方は全宇宙（ぜんうちゅう）を造（つく）られたの。あなたがおさら洗いを好きになるのを助けてくださるようにおねがいしたら、どうかしら？」

「おさら洗いを好きになるなんて！そんなの不可能（ふかのう）だわ！」。

「神様はおさがきれいになるのがお好きだと思わない？」

「たしかにそうだけど、わたしは、その仕事をお母さんがやってくれる方がいいわ！」

「メアリー、わたしに考えがあるわ。宇宙の創造主（そうぞうぬし：造られたお方）にあなたが、おさら洗いを好きになるのを助けて下さるようお願いしましょう。なんといっても、このお方は不可能（ふかのう）のことがおできになるのだから。それがこのお方の特別なところだということを覚えていてね。そして、あなたが自分の仕事を楽しむのをご覧になることを神様は喜（よろこ）ばれるのよ。だから、試（ため）してみましょうね。」

メアリーは笑（わら）いましたが、試してみることに賛成（さんせい）しました。二人